

## 総合文化研究所

東京外国語大学総合文化研究所は、「世界各地の文化・文学・芸術・人間諸科学の伝統と現状を総合的かつ複合的に調査研究することを目的」として、一九九六（平成八）年四月一日に本学外国学部付属施設として発足した。初代所長は西永良成。海外事情研究所、語学研究所の発足の約三〇年後という、いたって遅い出発である。二十一世紀をごく間近に控え、近年大学の内外を取り巻く環境の急激な変化により、教育の面でも研究の面でもとりわけ国際性及び学際性に配慮した意欲的な取り組みが不可欠の緊急事になった。本学ではそれを受け、従来のカリキュラムを抜本的に改革したことは周知の事実だが、本研究所もまた、研究の面においてそのような急速な変化に対応すべく構想された。すなわち本学に勤務する文学、人間諸科学の研究者としても旧来のように、国民国家単位の文化・文学の研究とか、十九世紀に起源をもつ学問分野の枠内での思考などに安住することは許されず、それぞれの分野の専門家たちが相互協力の新たな形態を探索せざるをえなくなった。その環境を整備することが本研究所の当初の主たる目的であり、この趣旨をよく理解された中嶋嶺雄学長の格別な尽力と支援を得て設立されたものである。

研究所の活動としては、九七年から公開講座「外国文学を翻訳する」を開催し、世界各地の文学の翻訳の歴史と現状、苦勞と楽しさなどについて、本学前学長原卓也、名誉教授河島英昭など優れた諸先輩の協力も仰ぎながら、本学に勤務する多彩な各国文学専門家が学外の一般聴衆にも分かりやすく講演し、好評を博している。また、内外の著名な学者、文学者、芸術家を招き、講演会その他を広く社会に開放する形で開催している。九七年にはフランスのコレ

ージュ・ド・フランス教授クロード・アジェージュの講演会、九八年には中沢新一の講演会やロシアのシヨスタコーヴィチ四重奏団の演奏会を主催したのを始め、今後も同種の試みを積み重ねてゆく予定である。

研究所の研究誌『総合文化』は九八年三月に創刊され、その後も年に一回刊行しているが、この研究誌の特徴は各号一つか二つの特集を組み、これに加えて所員の投稿原稿、活動報告などから構成するという、文字どおり「複合的かつ総合的」な試みにある。創刊号はロシア特集だったが、今後東アジア、東南アジア、中央ヨーロッパ、地中海地域、中東などの諸地域の文化・文学の特集を予定しているほか、さらには二十世紀における表象文化の世界性と地域性をめぐる共同研究、異文化研究の原理と方法についての理論的かつ実証的討論の成果の公表の場にもしたいと考えている。

以上、発足してわずか三年あまりの新しい、あまりにも新しい研究所であり、歴史を語ろうにも、肝心の歴史そのものがいたって浅いこの研究所の設立と活動の概要を述べた。総合文化研究所はなによりも未来のために存在し、未来に向けて活動を開始した研究所であり、その歴史はこれから作られる。発足後のここ数年はおそらく試行錯誤を繰り返しつつ、その歴史の基礎、しかも強固な基礎作りに費やされることになるだろう。ラテン語に「ゆっくり急げ」とか、「遅き、されど確かにして真直ぐな歩みをもって」といった意味の諺がある。この諺を新しい私たちの研究所のモットーとしたい。遅く発足したけれども、けっして焦ることなく、来たるべき新世紀を見据えて、ゆっくりと着実に歩を進めて行く。これが、本研究所の所員たちの現在の願いと決意である。